

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ  
Quarterly magazine FOYER  
2020 summer

つながる、ひろがる、あつまる  
ほわいえ

005

# FOYER



熊本県立劇場 館長 / 姜 尚中  
芸術・文化の灯を  
絶やしてはならない

Special feature

県劇アウトリーチ事業

劇場を飛び出して、  
文化芸術を届けよう。

*What is  
Outreach project?*



熊本県立劇場  
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】  
公益財団法人 熊本県立劇場  
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971  
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】  
株式会社 ジャム  
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017  
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2020 summer 発行日:2020.6.20 ※掲載内容は6.10現在のものです。

熊本県立劇場館長／姜尚中  
芸術・文化の灯を  
絶やしてはならない

世界を不安と恐怖のるつぼにたたき込んだような新型コロナウイルスのパンデミックは、日本でも様々な爪痕を残しつつも、まだ終息の目処が立たないまま、第2波、第3波の恐れも懸念されています。そうした中、手練りの試行錯誤が続いているとはいえ、緊急事態宣言も現段階（5月22日）で北海道と首都圏（一都三県）を除いて解除の方向に向かいつつあります。

4月7日、7都道府県を対象にした緊急事態宣言の発出以来、既に1ヶ月半以上が経ち、この間、観光や飲食業、交通や運輸、サービス業など、中小零細企業や非正規労働者、生活困窮者などに甚大なダメージが及び、営業や事業はもろろん、雇用や家計が存続の危機に瀕し、今後、失業率もリーマンショックを上回る規模になるのではないかと推計されています。

一部のシンクタンクの試算によると、4、5、6月の3ヶ月のGDPは、年率換算で20%を超える落ち込みになるのでないかという予測値

も出ている程です。このような凄まじい急激な収縮は、戦後、なかったことであり、90年前の大恐慌にも匹敵する不況が現実のものになるかもしれないほど厳しい状況です。大袈裟でなく、私たちはそれこそ、「生存経済」が脅かされかねない苦境に立たされているのです。

そうした明日をも知れない不安と脅威に苛まされている社会の中で人が集うことで成り立つ劇場やホール、オペラハウスやライブハウスさらにミュージアムや図書館など、一定の屋内施設と収容空間を擁する場所が事実上、稼働中止に追い込まれ、緊急事態宣言の解除後も、社会的距離（ソーシャル・ディスタンス）の確保や「3密」の回避、公衆衛生上の制約などを課され、「コロナ禍」以前に戻ることが不可能になりつつあります。

こうした中、芸術や文化事業、催し物の中止や、延期が相次ぎ、フリーランスのアーティストを含めて、一挙に、その活動の場を極端に狭められ、中には「生存経済」すらままな



らない窮迫した状況に追いやられている人々がいます。

確かに、困っているのは、みな同じであり、アーティストや芸術・文化事業にかかわる人たちだけでは無いという見方にも理があります。

ただ、今から70年前に発表された問題作『ペスト』で再び脚光を浴びつつあるフランスの作家、アルベール・カミュは、疫病が身体だけでなく、人間の心や想像力に甚大な作用をもたらし、その結果、社会が内側から綻んでいく様を見事にあぶりだしましたが、私たちはいま、同じような光景を日々、目にしているのかもしれない。そして「コロナ禍」は、健康を損ない、身体的な病をもたらし、経済を麻痺させ、さらに何よりも私たちの心の中の隠された情念を引っ張り出し、不安や恐怖、憎しみや嫌悪の情動に翻弄されかねない私たちの「ダークサイド」を暴き出しつつあります。

芸術や文化、芸能は、そうした「ダークサイド」に閉じ込められかねない私たちの心に光を投げかけ、聴覚や視覚をはじめ五感を通じて私たちの心を癒してくれる目に見えないセラピー（心理療法）でもあるのです。

医療現場のスタッフや資材、設備が足りなければ、医療崩壊が起きるように、そうした様々なジャンルのアーティストや芸能関係者、それらを支える舞台芸術や芸能のスタッフがその活動を断念し、「コロナとの共生」の時代に再び活動の場を見出せなくなれば、「文化崩壊」が起き、それは地域社会の存続をも危うくさせるに違いありません。ドイツのメルケル首相が、「連邦政府は芸術支援を優先順位リストの一番上に置いている」と語ったのも、文化や芸術、芸能が、社会の生命維持に極めて重要であり、「文化崩壊」は人心の荒廃につながり、結局、「社会崩壊」に行き着かざるをえないと認識しているからだと思えます。

ドイツと日本では国の仕組みや制度、その歴史的な背景も違っており、一概にドイツの場合をそのまま日本に当てはめることはできませんが、学ぶべき点は多々あるはずで

以上のような観点にたち、熊本県の芸術・文化の代表的な施設であり、県民の文化振興とそのため人材の育成を担う県立劇場は、今後、県民のみならずのご理解とご協力を支えに、様々な創意工夫を通じ

て、この困難な時代にあっても芸術・文化の灯を守り、アーティストたちの窮状に少しでも応えるべくさらなる努力と精進を重ね、「コロナとの共生」の時代にふさわしい劇場のあり方を模索していく所存です。芸術・文化、芸能は、社会の生命維持装置であり、それが途絶えれば「社会崩壊」に行き着かざるをえないことをしっかりと認識し、全力でこの芸術・文化、芸能の出番を作ってくださいと思います。皆さんのご理解とご協力をお願いする次第です。



県劇アウトリーチ事業

劇場を飛び出して、

文化芸術を届けよう。

## What is Outreach project ?

泣いたり、怒ったり、笑ったり。たった数時間で感情の動きを体感できる舞台。おなかの中までも響きわたるような音の感動に包まれるコンサート。そして、隣の人とその感動をわかちあう喜び。新型コロナウイルスの感染拡大により、舞台・音楽の鑑賞の機会が制限されているなか、文化芸術は「生きていく」うえのひとつのエッセンスとして、必要不可欠なものであることを実感された方もきっと多いはずです。全世界の劇場・ホールから、

一時的に拍手喝采が消えたなか、劇場としての役割はなにか、文化芸術を心の糧としてどう届けていくのか、アーティストへの支援をどのように行うのか。劇場という箱から出て、文化芸術を広める「広場」としての役割が、県立劇場にとって今後ますます必要とされると実感しました。今回の特集では、県劇の「広場」を象徴する取り組みとして、これまで15年以上にわたり続けてきた「県劇アウトリーチ事業」についてご紹介します。

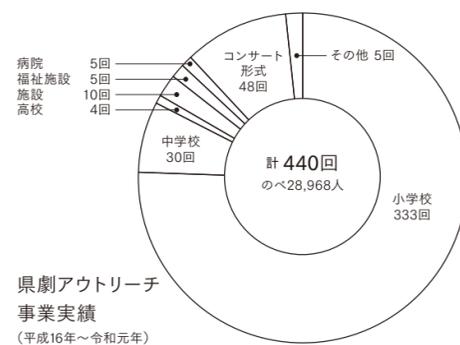
アウトリーチの活動では、プロの音楽家の演奏を聴き、好奇心があふれだす子どもたちの姿がよく見られます。



子どもたちに、  
本物の「音」を届けたい。  
劇場からの出前授業、  
アウトリーチ。

劇場の役割として、ホールでの演奏や舞台を企画し、実施することがありますが、地理的な条件や、さまざまなハードルによって劇場に足を運ぶことができない人々へ文化芸術に触れる機会を提供することも、劇場として求められる重要なことです。アウトリーチとは、文字通り「外に出て届ける」こと。県劇アウトリーチ事業は、市町村と共催し、小中学校や福祉施設などへ演奏家たちを派遣し、出前授業を実施するものです。ホールや体育館を使った鑑賞会ではなく、

音楽室などの小さな空間で、生の演奏を間近で聴きながら、クラシック音楽の魅力を伝えることを大きな目的としています。この事業は、国の施策として全国の公共ホールが取り組んできたものでありますが、県劇では独自の施策として平成16(2004)年から実施しています。当初は首都圏から演奏家を招き、小中学校に派遣していましたが、現在では熊本で活躍する、もしくは熊本出身のアーティストを登録アーティストとして派遣しています。17年間の活動で、アウトリーチを実施した学校・施設は延べ322箇所、人数にして約3万人に達しています。今年度も10月から地域ごとの小中学校への派遣が予定されており、今後はその活動を広げていくことも視野に入れています。





左:古賀美千代(ピアニスト)フリーランス 右:緒方愛子(ヴァイオリニスト)広島交響楽団所属  
 (実施校) 益城中央小学校 4年生 (実施日) 令和2年2月17日

協力アーティストレポート

ヴァイオリニスト  
 広島交響楽団所属  
 緒方 愛子

子どもたちからのフィードバックが  
 自分の演奏の幅を広げている

現在広島交響楽団に所属し、プロのヴァイオリニストとして活躍している緒方愛子さんは、平成26(2014)年から県劇アウトリーチ事業の登録アーティスト(現・協力アーティスト)として、小学校や中学校の出前授業、アクティビティに参加しています。熊本県出身の緒方さんは、登録当時は大学院生。「母が小学校の先生をしていて、その小学校にアウトリーチ事業でサクスのアンサンブル(カルテット・スピリタス)が授業をしたと聞きました。母はその授業内容にいたく感動したようで、授業の細かいところまで教えてくれ、私も参加したい、と思ったことがオーディションを受けるとききっかけになりました」と、教えてくれました。2日間のオーディションを受け、採用後に3日間の研修が行われ、そこで自分がどんな曲を子どもたちに伝えていきたいのか、真剣に向き合う日々だったといえます。専門家といっしょにプログラムを組み立て、授業を実施し、子ど

もたちのダイレクトな反応をもとに、またプログラムを考える。登録から6年もの間、プロとなり、広島県へ移り住み、生活環境が変わるとともに、子どもたちへ伝えたいこと、伝えたい作品は変化していったといいます。「アウトリーチを通して、得るものは多いです。子どもたちにこれを伝えたい、と向き合えば、子どもたちからのフィードバックが返ってくる。それによって、自分の演奏にも良い影響があるような気がしています」とのこと。

この日のプログラムとして緒方さんが選んだのは、葉加瀬太郎の耳馴染みのあるものから、プロコフィエフの「ヴァイオリンソナタ第1番」など5曲。子どもたちは、普段の授業で触れられる機会が少ない難解な作品も集中して聴いていました。ヴァイオリンを構成する材料、木の話や、骸骨が踊っている様を表現する独特の奏法などの話になると、好奇心に満ちた子どもたちの表情が印象的でした。

<子どもたちのアンケート回答>(※抜粋)

- ヴァイオリンは手でも、弓の反対側でも弾けることを初めて知った
- 弾くときれいな音が出る場所があってびっくりした
- ヴァイオリンの中に魂柱があって、それがずれるとダメだということがわかった
- 弓が馬のしっぽの毛でできていて、あんなにきれいな音が出るから不思議
- 「死の舞踏」が印象に残った



上:山本亜矢子(ピアノ)、下:山崎明(サクソフォン)

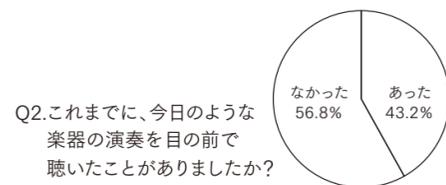
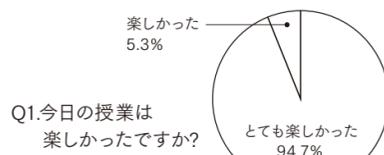


県劇が実施しているアウトリーチ事業の特徴は、授業の枠組のなかで子どもたちに伝えたいのか、音をどう表現していくのか、専門家のアドバースをもとに演奏家自身がプログラムを作成しているところにあります。演奏家の楽器や、得意分野などによって授業内容が変わっていくのが特徴です。例えば、楽器の音がどのように響くのか体感してもらったり、実際に子どもたちが楽器に触れ、音を出してみたり、作品の背景を音で感じてもらう

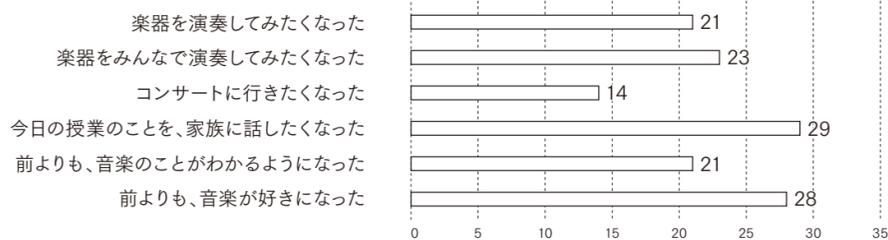
など、演奏家それぞれが工夫を凝らしたプログラムになっており、同じ演奏家でも毎年プログラムの内容がバージョンアップされていることもありま。じつと演奏を聴いているだけでなく、子どもたちの好奇心をくすぐるような演奏家の話しぶり、体を動かしたり、五感をフル活動する楽しい音楽体験を盛り込むことで、これまでに実施した事業のアンケート結果では、「授業が楽しかった」と答える子どもたちがほとんどでした。

音楽の魅力に、直接触れてもらいたい。  
 演奏家の思いも届けるプログラム。

児童アンケート アウトリーチ実施校/益城中央小学校 令和2年2月17日実施



Q3.今日の演奏を聴いて、やりたくなったことはありますか?(複数回答)



熊本県立劇場 演奏家派遣アウトリーチ事業

# 令和3・4年度登録アーティスト募集

熊本県立劇場では、平成16年度から  
県内各地でアウトリーチ活動を展開してきました。  
平成21年度からは、オーディションによって選ばれた県内在住や  
県出身の登録アーティストもアウトリーチ活動に参加しています。  
今後さらにアウトリーチ事業の発展を図るため、令和3年度から2年間、  
この事業に参加いただく登録アーティストを募集いたします。

## 選考～派遣までの流れ

令和2年 2020年	8月1日④～ 8月31日⑤	応募受付期間 対象 ※九州在住または熊本県出身で演奏活動を行っている演奏家。 ※令和3年4月1日現在で、満18歳以上、40歳まで。
	9月3日⑥	1次審査(音源による審査)
	9月中旬	1次審査結果通知
	10月中旬	アウトリーチ見学 劇場がアーティストを市町村に派遣して行うアウトリーチ事業を見学(詳細は調整中) ※全日程を見学する必要はありません。1次審査合格者は都合のよい日を選んで見学してください。
令和3年 2021年	11月16日⑦	2次審査(実技・面接審査) 30分程度(詳細は調整中)
	11月下旬	2次審査結果通知・アーティスト登録 4人以内を合格者として、令和3・4年度の登録アーティストとします。(伴奏者は除く)
	2月	研修会(全2回予定) アウトリーチ事業に精通した専門家による研修を受けていただくとともに、熊本市内の小学校でアウトリーチを体験していただきます。 研修内容:アウトリーチの概要説明、プログラム開発、小学校での模擬アウトリーチ など
	4月以降	市町村派遣 ※派遣先や派遣時期については、市町村の要望を受けて調整します。派遣に際しては、事前の会場下見・打合せにも同行していただきます。

申込先・お問合せ先

〒862-0971 熊本県熊本市中央区大江2-7-1 tel. 096-363-2233  
熊本県立劇場 アウトリーチ事業 登録アーティスト募集係



## 選考に当たって

第一に質の高い音楽を提供できる能力があることが条件です。また、事業趣旨を鑑みて次のような要素も考慮します。

- 多様な客層に対してアプローチできるプログラムを組めること。
- 多様な音楽を楽しむ環境を作るため、コミュニティとの交流を積極的に行う技術(話術など)、意志、アイデアがあること。

## 応募方法 応募期間 令和2年 8月1日④～8月31日⑤

応募者は、所定の参加申込書に必要事項を記入し、6ヶ月以内に録音した音源を添えて、申込先まで送付または持参してください。演奏曲目の指定はありませんが、ご自分を表現できる曲を2～3曲(15分程度)録音してください。音源を収録したメディアの本体に、氏名、演奏曲目(※調性、作品番号、楽章も明記)、記録日を記載してください。申込書および募集要項は県立劇場ホームページからダウンロードできます。その他詳細については県立劇場ホームページをご確認ください。



間近で見ると楽器の輝き、手に残る音の響き、そして初めて出会う名曲の数々にわくわくドキドキを隠せない子供たち。彼、彼女たちの豊かな芸術体験に県劇のアウトリーチ事業はなくてはならないものだ。  
これまでの活動について私が見た限りを総括すると、プレイヤーのオーディションに始まり、プレイヤーの養成から活動の実施まで必要なフローが確立されている。実施前の学校との打ち合わせも実に入念。ま

たプログラムの枠組みが完成されているからこそ、アーティストたちは実際の活動を淀みなく進めることができる。そしてそこに生まれる余裕に甘んじることなく自分たちの良さを発揮する。なによりアーティストたちの演奏は質が高い。  
このように長年の実績が蓄積された県劇のアウトリーチは、すでに成熟の域に達していて、今あるものを継承しつつ、さらなる高みを目指す時期にきているように思う。

以下は、今後の発展に期待する私の個人的な希望である。  
学校におけるアウトリーチ活動では、これまで通り「異質を味わう空間」を大切にしながら、学校の年間指導計画への位置付けを考慮してみてはどうだろうか。そのためには学校側との入念な打ち合わせ

せによるプログラム開発が必要となるが、子供たちの体験は学びへと確実に深化するだろう。次に参加型アウトリーチを取り入れることを提案したい。つまり「音楽を聴く」から「音楽をつくる」への転換だ。音楽をつくる体験は鑑賞や演奏活動を深める重要なきっかけであり、アーティストたちの演奏をより深く味わうことができるようになるだろう。最後に、演劇アウトリーチを実施してはどうだろうか。県劇には立派な演劇ホールがある。演劇ファンを増やす意味もあるが、自分を表現することの重要性が増す中、子供たちが演劇的表現に接することのできる機会があると良い。  
音楽は心の栄養であり人と人を結び、また演劇は自分の心をうまく表現する。今の自粛生活後、市民に一番必要なものはこの2つではないだろうか？ホールの外へ出て、これらを提供できる県劇アウトリーチ事業は今後益々重要なものとなる。

寄稿

熊本大学大学院准教授  
音楽教育学  
瀧川 淳

人と人をつなぐ県劇のアウトリーチのこれから

県劇スタッフリレーコラム  
事業グループ  
中野萌「なかのもえ」

### 「銀河英雄伝説」

皆さん、クラシック音楽は好きですか？そしてアニメは好きですか？この2つがお好きな方にぜひおすすめしたい作品があります。その名も「銀河英雄伝説」。熊本出身の田中芳樹さんによる同名小説を原作とした一連のOVA作品です。遙か未来、銀河に進出した人類は銀河帝国と自由惑星同盟に分かれ、長い間争っていました。そこへラインハルトとヤンという若き巨星が登場したことをきっかけに、壮大な英雄譚が紡がれていきます。

作品内では全編にわたりクラシック音楽が取り入れられています。例えばオープニングにはマーラー「交響曲第3番」が、戦いの場面ではラヴェル「ボレロ」がフルで使用され、ゆっくりと激化する戦況を見事に表現しています。他にもベートーヴェン、ブラームス、シューマン、ワーグナーなどの名曲が散りばめられ、その重厚なストーリーと音楽は今もなお多くのファンを魅了し続けています。

県劇スタッフリレーコラム  
舞台技術グループ  
貴田雄介「きたゆうすけ」

### 歩みを止めないこと 「人類の行進」 マナブ・間部作

県劇のモールの内に掛けてあるひと際大きな絵を見たことがありますか？この絵は、熊本県出身の画家マナブ・間部さんが1980年に描いた「人類の行進」です。私はこの絵から楽器を演奏する人とその演奏を聴く人を想像し、音楽の強いエネルギーを感じました。これまで判断に迷うことがある度にこの絵の前に佇み、励まされてきました。

県劇はこのコロナ感染症の影響で4月22日から5月6日まで臨時休館、そして予定していた多くの文化事業が中止または延期になりました。今、劇場には何が求められているのか、答えのない問いの前に、私は頭を悩ませています。

この状況で、アーティストやスタッフの友人たちも多くの仕事がキャンセルになりました。劇場も開けることが出来ず、友人の力になれない私

の立場の弱さと不甲斐なさを悔しく思っています。

以前、演劇史を学んだ時に、ある地点から別の地点に行進することが、それだけで「何かを表現することになる」と学びました。例えば、散歩がてらに買い物に行き、その帰りに公園で本を読むことを日課にしている老人がいるとします。一見何気ない日常かもしれないですが、それだけでも生きているという一つの表現になるのだと思います。

「人類の行進」にはマナブ・間部さんが制作中に考えられていたことがメッセージとして添えられています。

「我らはより良く生きるために文化を目指して行進する」(全文より一部抜粋)

いま再びこの絵とメッセージに励まされます。これまで様々な困難を前にして、それでもなお文化を生み育て、受け継いできた人類の歩みを思います。希望ある明日を目指し、昨日よりも一歩でも歩みを進められるように、歩み続けたいと思います。



「人類の行進」  
横6.0m×縦2.0m  
株式会社ニュースカイホテル所蔵

寄稿

熊本大学熊本創生推進機構  
准教授 田中 尚人

創造をとめない、みんながつながる広場「県劇」

全世界の人々が新型コロナウイルス感染症と闘っている。ここ熊本では、「4年前に起きた熊本地震の時と同じように」という人もいれば、「あの時とは違っている」という人もいる。感染症と災害は似ている部分もあれば、正反対のことを強いられることもある。その一つが「集う」ということだろう。つながりは、集うことから得られる宝物だ。

私は、平成30年度より(公財)熊本県立劇場文化事業評価委員会の委員長を務めている。きっかけは、熊本地震だった。益城町の復興を支援するために設置された熊本大学まじき



ラボの活動として、中高生や若者が主体的に復興まちづくりに関わる方法を模索する中で、私は県劇で働いている職員さんに4人出会った。全く違う場で出会ったのに、それぞれに県劇のすばらしさ、アートの持つ力を僕に教えて下さった。そして、そんなつながりのおかげで、ついには憧れだった平田オリザさんを益城町にお招きすることができた。

2017年3月18日に益城町にて行われた『平田オリザさんと、かたゝく小さなマチの新しい未来』というトークセッションにて、オリザさんは「二つの風」という話をされた。風化と風評、正反対の「二つの風」を東北にて感じたオリザさんが、共通の物語として震災を体験した子ども達の誰もが活躍できる社会を、本気の大人たちが創っていかねば、という力強いエールだった。

私は、オリザさんの『新しい広場をつくるー市民芸術概論綱要』を読み、「誰人もみな芸術家たる感受をなせ」、「文化による社会包摂」という考え方に共感した。地域固有の歴史

や文化、風景を規範としたまちづくりのお手伝いをしている私は、人々が集う広場こそ地域文化の源泉であると考えてきた。そして県劇の文化事業評価委員会に入った後に、姜尚中館長が「みんなの広場」を標榜しておられることを知った。評価委員会で、皆さんと議論しながら、私がいつも思い浮かべる理想の県劇の姿は、観客も職員も、集う人々がみな生き生きと輝き、歴史や文化を味わい、新しい未来を創る広場の姿である。

創造をとめない。熊本地震の時は、現場にアーティストや職員の方々が出向き、創造的活動を届けた。集うことができる創造的活動とは何だろうか？オンラインの交流活動でもいい、アマビエ様のような妖怪に登場してもらってもいい。熊本地震から学んだ多くのことを、新型コロナウイルス感染症対策にも活かすために、つながりを生み出す文化や芸術の果たす役割は大きい。広場では、皆が演者であり、観客である。集うことはできなくても、広場でつながることはできる。